

ティム・クック

アップルCEO

アップルの苦境期を 陰から支えた実務家

iPhoneやiPadなど、時代を変えた革新的な製品を次々と発表し、アップルを急成長させた故スティーブ・ジョブズ氏。この偉大なカリスマの後を2011年に引き継いだのが、現CEO（最高経営責任者）のティム・クック氏（65歳）だ。クック氏の指揮のもと、アップルは2018年に史上初の時価総額1兆米ドル企業に躍進。現在は約4兆米ドルまで額を伸ばし、エヌビディアやマイクロソフトなどと、世界の時価総額首位の座を争う（2025年11月上旬現在）。



2007年に発売されたiPhoneは人々の生活を劇的に変えた

1960年、米国アラバマ州で生まれたクック氏は、米オーバーン大学で生産工学の理学士号を取得した。大学卒業後はIBMに就職。IBMやコンパックでサプライチェーン管理などのキャリアを積み、1998年にアップルに入社する。

当時のアップルは経営陣と対立して追放されていたジョブズ氏が呼び戻されたばかりで、主力はパソコン。Windows95を発売したマイクロソフトの勢いに押され、業績不振のまつだ中にあった。そんな同社の救世主となったのがクック氏だった。クック氏は、部品サプライヤーや工場、リセラー（小売り事業者）をカバーする最先端の在庫管理システムを構築し、製造

から流通、販売までのオペレーションを効率化。コストと生産性の改善を進め、アップルの収益回復に大きく貢献した。

「最も謙虚なCEO」が目指す アプリ経済圏の拡大

2011年、病に倒れたジョブズ氏が、後継者に指名したのがクック氏だ。「実務のプロ」として活躍したクック氏はジョブズ氏とは正反対のタイプにも見え、「ジョブズ氏なきアップルに成長はあるのか」と不安の声も上がった。しかし、彼は堅実な判断と合理的な経営によって、それをはね返していく。緻密なデータ分析によってサプライチェーンや流通の効率化を徹底すると共に、ハードウェア売り上げへの依存から脱却し、ソフトウェア開発やサービス事業などに注力、「アプリ経済圏」の拡大を果たした。

知的で穏やかな人柄から「最も謙虚なCEO」と呼ばれるクック氏の経営の本質は、「対立」ではなく「協調」。時に独裁的との指摘もあったジョブズ氏とは対照的に、重視するのは対話を通じたリーダーシップと組織のチームワークだ。ジョブズ氏時代のような革新性から遠ざかっているという見方もあるが、同社を安定的な成長路線へと導いたクック氏の経営術には学ぶところが大きい。



毎年開催される年次開発者会議では、最新技術などが発表される

写真:ZUMA Press/アフロ、AFP/アフロ

「協調的リーダーシップ」で導く
ジョブズ氏亡き後のアップルを

Profile ていむ・くっく 1960年米国アラバマ州生まれ。IBMで12年間勤務し、製造・物流部門を率いる。コンパックを経てアップルに入社し、2011年に同社CEOへ就任。アップルを世界初の時価総額1兆米ドル（現在は約4兆米ドル）企業へと成長させた。

主な参考文献:『ティム・クック アップルをさらなる高みへと押し上げた天才』(リーアンダー・ケイニー著／堤沙織訳／SBクリエイティブ)、『アップル さらなる成長と死角』(竹内一正著／ダイヤモンド社)ほか